

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.251

10

October 2022

MCのネクスト
ジェネレーション

特集

02

©Dovile Sermokas

02 水戸室内管弦楽団 第110回定期演奏会

藤田真央(ピアノ)、セバスチャン・ジャコー(フルート)インタビュー

06 ベルチャ弦楽四重奏団

10 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

MCOのネクスト・ジェネレーション

水戸室内管弦楽団 第110回定期演奏会

文:中村 晃

1990年に結成して、30数年にわたって歩みを続けている水戸室内管弦楽団(MCO)。第110回定期演奏会では、MCOの活動を未来に繋ぐべく、2人の新しい世代の演奏家たちを迎え入れます。

1人目は、フルート奏者のセバスチャン・ジャコーさん。スイスのジュネーブ生まれ。ジュネーブ音楽院でジャック・ズーンに学び、2015年ミュンヘン国際音楽コンクールで優勝しています。日本では、2008年からはサイトウ・キネン・オーケストラに首席奏者として参加。また、ソリストとしてバイエルン放送交響楽団やミュンヘン室内管弦楽団等と共演。14年からはライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席奏者を務めています。そして、2022年秋より、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席奏者に就任予定であるとともに、水戸室内管弦楽団の正メンバーに加入することになっています。

もう1人は、ピアニストの藤田真央さん。2019年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞。21/22シーズンは、ミュンヘンでゲルギエフ指揮ミュン

ヘン・フィルハーモニー管弦楽団、エルサレムでエッセンバツハ指揮イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドンでワシリー・ペトレンコ指揮ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団などと共演。22年3月にはシャイー指揮スカラ・フィルハーモニー管弦楽団との共演でミラノ・スカラ座デビューを果たしています。今夏はシャイー指揮ルツェルン祝祭管弦楽団との共演でルツェルン音楽祭にデビュー。21年11月には、ソニークラシカルと専属レコーディングのワールドワイド契約を締結しました。

これら新時代の輝く2人を迎える第110回定期演奏会は、オール・モーツァルト・プログラムでお贈りします。セバスチャン・ジャコーさんがソリストを務めるのは〈フルート協奏曲 第1番 ト長調〉K.313(285c)。モーツァルト(1756-1791)がマンハイムで1778年に作曲した作品です。宮廷音楽家としてヨーロッパに名を馳せていたフルート奏者のヨハン・バプティスト・ヴェンドリングから紹介されたオランダ人愛好家ド・ジャンからの依頼を受けて作曲されました。

藤田真央さんがソリストを務めるのは〈ピアノ協奏曲 第23番 イ長調〉K.488。1786年に作曲されたこの作品は、モーツァルトの協奏曲の中でも、最もよく知られた作品のひとつです。全ての主題が親しみやすく魅力的で、室内乐的な繊細さの中に深い情趣が宿っています。第2楽章と第3楽章には即興性をもつカデンツァが設けられてなく、細部に至るまで自身の音楽を書き込みました。モーツァルトのこの作品への情熱が窺い知れます。

そして、演奏会の最後を飾るのは、〈交響曲 第40番 ト短調〉K.550。モーツァルト晩年の「三大交響曲」の2番目の作品です。MCOでは、これまでにこの作品を2回取り上げています。最初は1993年のシモン・ゴールドベルク氏が指揮した第13回定期演奏会。その次は2004年の小澤征爾MCO総監督が指揮した第58回定期演奏会です。今回はMCOの大きな活動の柱のひとつである指揮者無しでの演奏となります。2人の大巨匠との共演を凌ぐ新しい演奏を切り拓く為に、MCOメンバーが精魂を傾けて挑みます。



©Dovile Sermokas

孤高の音楽作りを 藤田真央(ピアノ)インタビュー

聞き手:中村 晃

—2019年のチャイコフスキー国際コンクールの入賞以来、国際舞台でたいへんな活躍をされていますが、最近はどうなご活動をされていますか。

今まさにスイスのルツェルンを訪れています。こちらではリッカルド・シャイー率いるルツェルン祝祭管弦楽団との公演を控えています。先月(7月)

はヴェルビエ音楽祭(スイス)、ロックンハウス音楽祭(オーストリア)、ラ・ロック・ダンテロン国際音楽祭(フランス)の舞台を経験しました。加えて来月はツィナダリ音楽祭(ジョージア)に参加する予定です。ようやく世界情勢が戻りつつあり、世界各地で演奏活動が行えることを大変喜ばしく思っております。



— 藤田さんは、2018年2月と2020年7月に水戸の佐川文庫でリサイタルを行っていらっしゃいますが、その時の思い出をお聞かせください。

2020年のリサイタルは特に印象的です。コロナ禍の影響により3、4ヶ月の間舞台を踏む機会を失っていましたが、その後のリスタートの機会が佐川文庫さんでのリサイタルだったので。オンライン上での演奏や無観客公演では感じる事の出来ない、温度を持った生のコンサートに深い感慨を覚えました。

— 水戸室内管弦楽団とは、初めての共演となりますが、この楽団についての印象をお聞かせください。

世界の第一線で活躍する選りすぐりのメンバーの集った楽団と存じております。一人一人が意思と意見を持って音楽に向かっている印象を感じるので、他のオーケストラでは味わえない孤高の音楽作りを共に体験できると期待しております。

— 今回の公演では、水戸室内管弦

楽団の演奏の大きな柱のひとつである、指揮者無しでの演奏を藤田さんにもお願いすることになります。協奏曲のソロを指揮者無しで演奏されるのは、今回が初めてですか？

NHK交響楽団とモーツァルト〈ピアノ協奏曲第26番〉、アンサンブル金沢とモーツァルト〈ピアノ協奏曲第20番〉を指揮者なしで演奏させて頂いた経験があります。ソリストにとっては指揮者がいることに越したことはないのですが(笑)、しかし奏者同士で能動的に意見を出し合うリハーサルの過程には音楽的な意義があると感じております。

— 今回の公演のプログラムは、モー

ツァルトを中心に構成したいと考え、藤田さんの演奏曲もモーツァルトの協奏曲でとお願いしました。そして、藤田さんは、〈第23番 イ長調〉K.488の演奏をご提案くださいました。この作品をお選びになった理由と、この作品の魅力を教えてください。

この作品を公で披露するのは今回が初めてになります。モーツァルトならではの曲想の劇的な変化が特徴的な作品ですが、その要素を恣意的ではなく、明確なビジョンを持って描く為には表現力が必要になる一曲です。水戸室内管弦楽団の皆さんとならそれを実現できると思い、提案させていただきました。

— 最後に今回の公演を楽しみにしてください。水戸の聴衆にメッセージをお願いします。

初めての水戸室内管弦楽団の皆さんとの共演、初めての水戸芸術館での公演です。そんな新鮮な舞台での影響・刺激が音楽に如実に現れると思います。加えて私にとって半年振りの日本での公演となります。海外での経験を吸収中の発展途上にある藤田真央を是非暖かく見守ってください。

8月12日

協力：株式会社ジャパン・アーツ



人生そのものがインスピレーションの源

セバスチャン・ジャコー(フルート)インタビュー

聞き手:高巢真樹



今回の水戸での演奏会のあとは、すぐベルリンに直行し、翌日からベルリン・フィルでの仕事が始まるというご活躍のセバスチャン・ジャコーさん。プライベートではこの夏に結婚され、公私ともに新生活を迎えられている中、8月のセイジオザワ松本フェスティバルで来日された際、貴重なお話を伺いました。

—最初にセバスチャンさんとフルートの出会いについて教えてください。

私は5人兄弟の長男で、兄弟全員が音楽家です。私は最初、リコーダーを始めることにしました。もともと何か息を使う管楽器がいいと思っていたんです。というのは幼い頃、呼吸機能に問題があって、呼吸が止まるのが頻繁にあり、そのたびに母が助けてくれました。ですので自分にとっては呼吸を使う楽器が大事だろうと思っていたんです。リコーダーは楽しかったですね。

でもどうしても限りがあるように感じ始めたとき、隣の部屋の人がフルートを吹いていて。私もやりたくなり、8歳のときにフルートを始めました。

子供の頃から培われたフレージングの感覚

—少年時代に特に影響を受けた先生は？

最初に習った先生には、フルートの吹き方だけでなく、音楽全般について学びました。その先生は、楽譜上の全ての音符に、その音がどう演奏されるべきかを細かく書き示してくれたんです。アクセントがあったら、それは長めなのか短めなのか。デクレッシェンドがあれば、音の減衰は緩やかなのか、素早くなのか。当時はそのことをあまり認識していなかったのですが、彼が数年前に亡くなり、彼からもらったスコアを見返したら、楽譜に全てのフレージ

ングを書き込んで教えてくれていたことに気付いたのです。そしてバッハやパーセル、ヘンデル、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ、テレマンなどバロック音楽のレパートリーを全て網羅しました。その4年間で、その後の学びの基礎となりました。

—15歳という若さで入学したジュネーヴ音楽院では、ジャック・ズーン先生からはどんなことを学びましたか？

彼に初めて会ったとき、私はまだ若かったので、父親のような存在でした。それにジャックもジュネーヴに住み始めて2年くらいで、まだフランス語を完璧には話せない時期でしたが、彼が吹くのを見れば、言葉はなくても彼が伝えたいことをはっきり理解できました。それにジャックは、生徒の一番いいところを引き出そうとしてくれるんです。彼がアイディアを生徒に押しつけるのではなく、生徒の考えを引き出して、そ

れを表現するための道具を与えようとしてくれました。そして、その相手が持つパーソナリティや愛、音楽、アイデアを求めていました。本当にオープンマインドな人なので、大好きです。

マエストロオザワとの初共演 忘れられない思い出

——サイトウ・キネン・オーケストラに初参加された19歳の頃から現在までのマエストロオザワとの共演で、特に印象深いことを教えていただけますか？

セイジとはたくさんの思い出があります。サイトウ・キネン・フェスティバルに初参加したのは、オペラ「利口な女狐の物語」が上演されたときです。私にとって、オペラは初めて。それと奇遇にも、私の母はヤナーチェクと同様チェコ出身だったので、私もチェコ語を少し知っていたんです。セイジと会ってまず驚いたのが、リハーサルで彼が歌手に要所要所で合図を出す際、歌手と一緒にオペラの歌詞全てをチェコ語で歌っていたことです！セイジは音楽の作り方が本当に素晴らしいですが、歌詞を原語のまま学ぶ時間も捻出していることに、ショックを受けたといっても過言ではありません。ちなみに当時リハーサルは日本語で行われ、英語は一言も使われていませんでした。でもセイジが話す日本語は、なぜか理解できる気がしました。彼には伝えたいことを表現する天性の才能があり、純粋で率直で、とにかく圧倒的な人柄の持ち主なので、みんな言語を超えて、彼の意図を理解するのです。そんなセイジとはすぐに心が通じ合った気がしましたし、本当にまた一緒に演奏したいです。水戸でも松本でも、皆が彼との思い出を大切にしています。彼がどんな演奏を望み、どんな言葉を使って、ど

う指揮するか。みんな分かっているのです。それが、水戸室内やサイトウキネンの演奏を特別なものになっています。

——モーツァルトのフルート協奏曲第1番について、今もあなたを魅了するのはどんなところでしょうか？

フルートにはそもそも、協奏曲のレパートリーがそれほど多くありません。それにモーツァルトのフルート協奏曲は、たいていの演奏家はオーディションで演奏する曲なので、あまりいい思い出がない人も多いかもしれません。でも今の私には、この曲の純粋さや魔法のようところが感じられて、お気に入りのコンチェルトの一つです。モーツァルトならではの美しさに満ちていますし、洗練された個性を持つフレーズがたくさん登場します。子どもから大人まで、誰の心にも響くものがある、それがモーツァルトの音楽の魔法です。私は彼の音楽の中に、彼の人生が反映されているように感じています。

今この瞬間を生きること

——素晴らしいキャリアを築いてきた中で、音楽のインスピレーションの源は？

その答えはとてもシンプルで、life(人生)です。その人がもし今この瞬間を生きていなければ、いい音楽を作ることなど難しいのではないのでしょうか。作曲家も人間ですから、彼らも自分の人生観や経験を音楽に反映しています。もちろんバッハやモーツァルトが生きた時代の生活を直接知っているわけではありませんが、想像はできます。ネットもエアコンも、Wi-FiもBluetoothも、ヨーロッパとアジアをつなぐANAもなかった時代。人々の生活はもっと不便で、自然に近いものでし

た。でも同時に、今私たちが生きているのは2022年で、1700年代ではない。だから当時の作曲家が抱いた感情を表現するには、今の聴衆の心にも通じる何かを見つけなければいけないと思うんです。例えば、あるフレーズを悲しげに表現したいとき、なぜそういう感情に至ったのかまで具体的に想像してみる。幸せな思い出を失ったのか。自分の誕生日がまだ来なくて、待ちきれなくて辛いのか。失恋したのか。お気に入りのコインを失くしたのか。コンクールに落ちたのか。一口で「悲しい」といっても、それは千もの物語になりうるわけです。あなたの思い描くストーリーが明確であれば、その演奏を聴く人は、音楽から何かを感じとりやすくなると思います。だから生徒には、「その曲をどう表現したらいいか分からないなら、楽器をしまつて散歩に出なさい」とよく言います。言うべきことは、フルートの中にはありません。楽器の中はただの空洞です。だから私は、自分の人生を生きて、よく観察して、人生のささやかな瞬間や、細やかなアイデアをたくさん心に蓄えていくことを大切にしています。

8月13日

※インタビュー全文は、当館ウェブサイトに掲載いたします。

■公演情報

水戸室内管弦楽団 第110回定期演奏会

10.28(金) 19:00

10.29(土) 15:00 予定枚数終了

全席指定 S席 ¥8,000 A席 ¥6,500

B席 ¥5,000 U-25(25歳以下) ¥2,500

●独奏

セバスチャン・ジャコー(フルート)、
藤田真央(ピアノ)

●プログラム

モーツァルト：

フルート協奏曲 第1番 長調 K.313(285c)

ピアノ協奏曲 第23番 長調 K.488

交響曲 第40番 短調 K.550

芸術の普遍的な価値を追い求めて

ベルチャ弦楽四重奏団演奏会

文：関根 哲也

現在、世界トップクラスの人気と実力を誇るベルチャ弦楽四重奏団が、10月9日に水戸芸術館に初登場します。

ベルチャ弦楽四重奏団は、第1ヴァイオリンのコリーナ・ベルチャが中心となり1994年にイギリスで結成されたカルテットです。2011～12年に録音されたCD「ベートーヴェン：弦楽四重奏曲全集」は21世紀のベートーヴェン演奏のスタンダードとして高く評価され、ロンドンのウィグモア・ホー

ル、ベルリン・フィルハーモニー、シャンゼリゼ劇場などヨーロッパの有名な会場で演奏活動を続けています。

そんな世界各地から引く手あまたのベルチャ弦楽四重奏団が、今回水戸芸術館で演奏するのは、“太陽四重奏曲”の愛称でも親しまれるハイドンのセットから歌の魅力にあふれた作品20の2、大戦そして冷戦という時代に翻弄されたショスタコーヴィチの本心が窺える作品110、伝統的な形式を

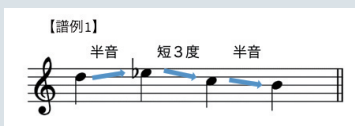
借りて新たな音響の扉を開いたドビュッシー唯一の弦楽四重奏曲の3曲。まさに均整のとれたプログラムと言えましょう。

本号では、ショスタコーヴィチ作品に注目し、作曲家が自らの刻印のように作品に埋め込んだDSCHの音列について、ロシア音楽研究者の中田朱美氏にご寄稿いただきました。

ショスタコーヴィチとDSCHモノグラム

中田朱美(国立音楽大学准教授)

よく知られているように、ドミトリー・ショスタコーヴィチДмитрий Шостакович(1906-1975)は様々な作品のなかで自分の名前にもとづく音列D-ES-C-H(レ-ミb-ド-シ)を使った。これは、ロシア語キリル文字による名前のイニシャルД. Ш.をドイツ語式翻字D. Sch.に置き換え、Sをドイツ語音名Esに読み替えて作ったものである。この響きはこれまでにDSCH主題・音型・動機・モノグラム・音名象徴・モットーなどと語られてきた。ショスタコーヴィチ自身は、たとえば《弦楽四重奏曲第8番》について友人グリークマンへの書簡において、「D. Es. C. H.の音、つまり私のイニシャル(Д. Ш.)が主要主題になっています」とだけ説明している。



さてこの4音音列はかなり独特な響きがする。どう独特かという説明はなかなか難しいが、【譜例1】のように半音上行・短3度下行・半音下行からなり、最初の3音(レ-ミb-ド)という短3度にいたる響きが物悲しい一方で、最後の音程がまた半音であるため、終止感が生まれにくい。かつ第2音の最高音ミbと最後の最低音シの音程が減4度である点も、不安定さを醸す原因になっている。この響きがときに家紋のように刻印されると、もとのイニシャルの象徴性とあいまってまさにモノグラムという表現がぴったりくる。モノグラムとは、2個以上の文字を組み合わせて図案化したものこと。イニシャルの頭文字の組み文字からなる商標ロゴを思い出す方も多だろう。DSCHもイニシャル2文字で作られており、なによりいったん認識してしまうと元には戻れないほど、耳が反応してしまう強烈な響きである。ソ連の国民

的作曲家の一人であったショスタコーヴィチが主に後半生の作品で多用したこのモノグラムについて、ここであらためて考えてみたい。

モノグラムの先行例

まずショスタコーヴィチは自分のモノグラムを発想した際に、どのような例を知っていたのだろうか。まずはJ.S.バッハの有名な未完作品《フーガの技法》(1740年代)に出てくるいわゆるBACH主題(シb-ラ-ド-シb)の例が筆頭に挙がるだろう。ショスタコーヴィチは生涯にわたってバッハを深く敬愛していた。彼がバッハを弾き始めたのは11歳になる1917年のこと。どうやらフーガから習い始めたようである(ソ連の音楽学者でショスタコーヴィチの御用伝記作家であったヘントヴァは、ピアノを習い始めた最初の2年でショスタコーヴィチが《平



©Deutsche Fotothek

均律》全曲を弾いたと記述しているが、根拠が示されていないためこれは信憑性に欠けると考えられている。翌1918年には音楽の試験で《平均律》の第6番の前奏曲とフーガなどを弾いている(第1巻と第2巻のどちらかは不明)。そしてここから30年以上を経た1950年に、ショスタコーヴィチはライブツィヒでバッハの没後200年記念で開催された第1回国際バッハコンクールに審査員として参加した(写真はその時に撮影されたもの)。友人のグリークマンによると、帰国したショスタコーヴィチはバッハがいかに傑出した職人で天才的な作曲家であったかを熱く語っていたという。そしてこのコンクールで24の前奏曲とフーガからなる《平均律》の数曲などを弾き1位を受賞したタチャーナ・ニコラエヴァの

演奏に感銘を受け、ショスタコーヴィチ自身《24の前奏曲とフーガ》Op. 87 (1950-51)を書き上げたのだった。自ら《フーガの技法》を補完することはなかったが、1960年代に弟子のバルシャイが《フーガの技法》を補完しつつ室内オーケストラ版を編曲した際には、その意義を強調し、作業を完遂するよう強く激励したという。

もちろんBACH以外にもモノグラム例は枚挙にいとまがない。ショスタコーヴィチはピアニストでもあったので、知っていた可能性が高いものとして、シューマンの《アベッグ変奏曲》(1830、ABEGG=ラ-シb-ミ-ソ)、《謝肉祭》(1834-35)、ブラームスのヴァイオリン・ソナタ《F.A.E.ソナタ》(1853、1935年出版、ファ-ラ-ミ)、さらには音楽院在籍時に室内楽の教師

であったグラズノフの《ベリヤーエフの主題にもとづく弦楽四重奏曲》(1886、BLyaF=シb-ラ-ファ)とピアノ曲《ザペーラにもとづくワルツ》(1890、Zabela/Sabela=EsABELa=ミb-ラ-シb-ミ-ラ)といった楽曲がある。

またこうした音名へのもじりは音大生の遊び心をくすぐるものである。やはりリ連の作曲家の一人ミヤスコフスキー(1881-1950)も、1910年にリヤードフ(1855-1914)の作曲クラスの修了作品の1つとして提出した弦楽四重奏曲第3番(1910-30、1931年出版)でこうした遊びをしていた。師リヤードフがグリーグを嫌っていたことから、第1楽章第2主題に「B-Re-Gis Lya-Do-Fa」(1931年Muzgiz版で練習番号5から)という音列で「リヤードフに気をつける Берегись Лядова / Beregis' Lyadova」という文字を刻んだのである。ここにはドイツ語音名とロシア語音名が混在しており、「シb-レソ#-ラ-ド-ファ」となる。さらにこの最終楽章にあたる第2楽章《主題と変奏》では、グリーグのピアノ曲《16のノルウェー民謡》(1896-97)Op.66の第7曲《子守り歌》の旋律を9小節まるまる引用して主題とした。修了作品で師を揶揄するとはなんという度胸だろう。もっともリヤードフの名前のモノグラム自体はミヤスコフスキーの考案ではなく、リヤードフ自身が1897年にピアノのための《前奏曲》でご丁寧にも説明つきで使っており、ミヤスコフスキーの学生時代にはもはや公然のモノグラムであった。ちなみに、ロシア語の「ラ」は「ля/lya」であり、リヤードフЛядовの楽譜が外国で出版された折には「Liadoff」のようにキリル文字の「в」(ローマ字翻字ではv)を「ff」に置き換えることもあったため、「リヤ-

ドF(Lya-Do-F(a))の表現は原語の発音にかなり近い音名象徴だったと言える。

ショスタコーヴィチの場合

このように、ショスタコーヴィチ以前のモノグラムはどちらかというとなり名前を軸にしているものが多かったようである。そのためショスタコーヴィチの場合も“Shostakovich”にもとづく何らかの音列になってもおかしくはなかった。しかしショスタコーヴィチはイニシャルの2文字を選び、先に【譜例1】で見たように半音2つの中に短3度をはさむ4音となった。そしてこれは敬愛するバッハのモノグラムと同じ音程構成になっている。BACHの場合は、半音下行・短3度上行・半音下行であり【譜例2】、上行・下行の向きは異なるものの、半音・短3度・半音という点は共通する。自分のモノグラムをDSCHとした背景には、ひょっとするとBACHとのこうした相似性も関係していたのかもしれない。

【譜例2】



さてショスタコーヴィチはこのモノグラムをいつ頃から「意識」し始めたのだろうか。これにかんするショスタコーヴィチ自身の言質は確認できていないため推測の域を出ないのだが、まずはショスタコーヴィチが好んだ語法から話を進めてゆきたい。DSCHの4音は下から順番に並べ直すと「シド-レ-ミb」という「半音-全音-半音」の響きになる【譜例3】。これは上から並

【譜例3】



べ替えて「ミb-レ-ド-シ」にしたとしても同じで、やはり「半音-全音-半音」の響きとなる。上から奏でも下から奏でも「半音-全音-半音」。まるで「この子とこの子(このここのこ)」といった回文のような響きである。この音列は自然的音階の中には存在せず、必ず臨時記号をつけなければ生まれないため、この音列自体がやはりかなり独特な響きとなり、強烈な存在感を発する。ショスタコーヴィチは創作活動の早い段階から、この「半音-全音-半音」の響きを自分の音楽語法の一部として好んで使っていた。

「半音-全音-半音」が最初に出てきた例を断定することも非常に難しいのだが、少なくともまだ学生だった1924～25年に書き上げた弦楽八重奏のための《2つの小品》Op. 11の第2曲《スケルツォ》に、「シb-ソ-ミb-レ-ド-レ-ミb-ド-シb-レ-シ」(84小節前のアウトタクト～)というこの音列(□で囲った部分)を含んだフレーズとその反復が認められる。

本作は卒業作品の交響曲第1番 Op. 10と並行して取り組んでいたものの、両者の作風は大きく異なる。《2つの小品》の方は1920年代の前衛的な志向に満ちた挑戦的な楽曲であったが、この先の作品でも「半音-全音-半音」は様々な音高上で構成音として用いられた。つまりこうした傾向の上にDSCHの発想が重なったのである。その展開はきわめて自然であり、作曲技法上の線引きのようなものも確定的には引けない。

この4音音列がフレーズ冒頭で登場し、反復を伴う場合や、はっきりとフレーズの終わりに登場する場合などは、DSCH由来の可能性を考慮することができる。たとえば弦楽四重奏曲第2番(1944)第1楽章(序曲)の対旋律の「シ-ド-レ-ミb」(26小節～)、交響

曲第9番(1945)第1楽章のまさに最後の「シ-ド-レ-ミb、ソ-ミb」、そして交響曲第10番の前年に書き、全楽章にわたってこの第10番との旋律的な繋がりが認められる弦楽四重奏曲第5番(1952)のたとえば第1楽章冒頭の「ド-レ-ミb-シ-ド#」などで、DSCH由来の可能性を疑っても良いかもしれない。

しかしDSCHモノグラムを「意識」した可能性と、「明示」しようとしたことは別の問題であり、ショスタコーヴィチが明示へと向かった布石として捉えられるのがヴァイオリン協奏曲第1番(1947-48)である。ショスタコーヴィチの作曲技法は有機的な動機展開(いわゆる動機労作)が緻密であり、かなり前もって、ときに楽章をまたぐ形でひとつの完成形が準備されている。この協奏曲でもDSCHからの派生動機や移高形による丁寧な有機的展開が認められるが、DSCHがオリジナルの音高で順番に提示されることはない。この4音がほかの音を介しながら中心的な音として辿られることはあっても、連続する形で登場することはないのである。つまりモノグラムを用いようとして、あえて近似的な動機の形に留め、最終的な形を見せるには至っていない。

「レ-ミb-ド-シ」がはっきりと誰の眼にも見紛うことのない形で、つまり「これは私のサインです」と言わんばかりに「明示的に」使われたのは、交響曲第10番(1953)においてである。第10番ではDSCHがまさにこの音高で何度も登場する。まず第1楽章冒頭で、「ミ-ファ#-ソ-レ#」と移高しつつ音の順番も変えた形、つまりアナグラムで登場する。第2楽章主題では「シb-ド-レb-ミb」といった「全音-半音-全音」というDSCHの「半音-全音-半音」とは対照的な音程からなる4音を

軸とする主題に離れる。その後、第3楽章第2主題はDSCHからなり、第4楽章ではクライマックスでトゥッティ（総奏）でDSCHが轟いた後、さらにコーダで金管楽器群によって熱狂的に連呼される。本作以前に作曲家のモノグラムをここまで轟かせた作曲家、作品はあったらどうか。

そしてこの交響曲第10番を皮切りに、このDSCHはショスタコーヴィチのサインとして、誰もが知るところとなった。たとえ別の高さから始まる移高形であっても、アナグラムであっても、派生動機・ほのめかし・パロディなどとして聴衆と共有されるようになったのである。英語でこうしたモノグラムや音名象徴のことを「音楽的暗号 musical cryptography」ということがあるが、交響曲第10番以降のDSCHの場合は暗号と表現するのに違和感を覚えるほど公然とした共有が図られている。

このように明示的な例が、この後、《弦楽四重奏曲第8番》(1960)、バスとピアノのための《自作全集への序文とそれについての短い考察》(1966)と続く。《弦楽四重奏曲第8番》では、全5楽章にわたってDSCHが使われている。モノグラムが全楽章にわたって登場するのは後にも先にもこの作品だけである。《自作全集への序文》は『作品全集』出版企画の発表に際して「序文」に代えて書かれた歌曲であり、またそれについての短い考察などから分かるように、この曲自体が洒落である。さらにここではなんと「そしてこれが署名、ドミトリー・ショスタコーヴィチ、ソ連邦人民芸術家」という歌詞のところでDSCHモノグラムがこれ見よがしに奏でられる。1966年5月28日、レニングラードのフィルハーモニー小ホールで行われた初演では



©Marco Borggreve

ネストレンコの独唱にショスタコーヴィチ自身がピアノ伴奏をしたが、喝采を浴びた様子が目に浮かぶ。ソ連時代にあって、大の大人が大規模なプロジェクトでこうした洒落を決め込むというのは、なんと健全で創造的だったことだろう。こうしたことはある程度、洒落が成立する場、つまり本人もユーモアも周りから温かく受け入れられていなければ難しい。ときに熾烈な文化統制が敷かれたソ連においてもこうした余裕が存在していたことには安堵を覚える。

ユーモアはショスタコーヴィチの得意とする気質であり、その精神は未完の歌曲《反形式主義的ラヨーク》(1948 or 1957以降)に凝縮して認められる。これは生前、未発表とされ、自由に書かれた作品なので尚更である。ここでは純粋な形でのモノグラムではなくパロディとして使われている。「人民作曲家」と「反人民作曲家」を比較する歌詞で、例の「半音-全音-半音」の音列を移高した「ド-レ♭-ミ♭-

ファ♭」が繰り返される。まるで前者は前者、ある時は後者と都合よく使われるショスタコーヴィチ像への揶揄のように響くのである。

DSCHにまつわる一連の展開にはショスタコーヴィチの知的好奇心が溢れているように感じられる。だがひとたびこの響きが明確に示されると、そこでは作者の声の代弁のような意味論的解釈を誘い、重みを背負う。《弦楽四重奏曲第8番》におけるDSCHはまさにそうした投げかけとしての響きと言えよう。

カルテットプレミアム・シリーズ ベルチャ弦楽四重奏団

2022.10.9(日) 15:00
全席指定 一般¥5,500、
U-25(25歳以下) ¥1,800

●プログラム

ハイドン:弦楽四重奏曲 八長調 作品20-2
Hob.III-32
ショスタコーヴィチ:弦楽四重奏曲 第8番 ハ
短調 作品110
ドビュッシー:弦楽四重奏曲 短調 作品10

INFORMATION

※以下は9月1日現在の情報です。

最新情報は当館Webサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《9.24(土)発売分》

■クリスマス・プレゼント・コンサート2022

12.24(土)17:00

■木村理佐 オルガン・リサイタル with 原田真侑

～時空を超えたオルガン紀行～

1.7(土)19:00

9・10月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆講座「ディスクとともに語る吉田秀和初代館長の思い出」

音楽を心の友と一吉田秀和館長の豊かなる日々

9.17(土)14:00

料金[全席指定]¥800(財団運営維持委員会および水戸芸術館メンバーは¥500)

◆水戸室内管弦楽団メンバーによる

水戸ジュニアオーケストラ 公開セミナー(入場無料/要入場券)

9/19(月・祝)13:00

◆大西順子カルテット「Grand Voyage」【予定枚数終了】

9.24(土)17:00 ★会場:ACM劇場

料金[全席指定]A席¥6,000/B席¥5,000/U-25(25歳以下)¥2,000

◆茨城の名手・名歌手たち 第30回演奏会

10.2(日)16:00

料金[全席自由]¥1,500

◆ベルチャ弦楽四重奏団

10.9(日)15:00

料金[全席指定]一般¥5,500/U-25(25歳以下)¥1,800

◆水戸室内管弦楽団 第110回定期演奏会

10.28(金)19:00、29日(土)15:00 ※29日は【予定枚数終了】

料金[全席指定]S席¥8,000/A席¥6,500/B席¥5,000/

U-25(25歳以下)¥2,500

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/要事前予約)

□9.19(月・祝)12:00~12:30/13:30~14:00 安井歩

□10.16(日)11:00~11:30/12:00~12:30 平野由衣

◆プロムナード・コンサートEXTRA(入場無料/要事前予約)

□9.23(日)11:30~12:00/13:30~14:00 Mélange Quintette(木管五重奏)

2022年9月6日発行(第251号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

追悼 小口達夫氏

水戸室内管弦楽団名誉顧問の小口達夫氏が8月18日、東京にて91歳で逝されました。氏は、1990年の水戸芸術館開館時より、吉田秀和初代館長とともに、水戸の音楽文化の振興にご尽力され、水戸室内管弦楽団、水戸カルテット、ATMアンサンブル、ミト・デラルコ、新ダヴィッド同盟の専属楽団の総楽団長として、楽団の発展に計り知れないほどの貢献をなさいました。

とりわけ水戸室内管弦楽団の活動では、楽団員との交流を深め、オーケストラがファミリーであるような一体感を作り上げ、さらに財政基盤の確立にご尽力されました。これまでの3回のヨーロッパ公演では、海外マネジメントや現地主催

Lucky FM 茨城放送「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト <https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジオ)でもお聴きいただけます <https://radiko.jp/>



好評
放送中!

《10.29(土)発売分》

■ちょっとお昼にクラシック

池松宏(コントラバス)、吉野直子(ハープ)

1.18(水)13:30

「みんなクラ」は
グラスを傾けながら
radikoのタイムフリーで
聴くのもイラしいよ!



演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場



◆スカパン SCAPIN

原作:モリエール「スカパンの悪巧み」

潤色・美術・演出:串田和美

10.15(土)、16(日)各日14:00

料金[全席指定]S席¥5,000/A席¥3,500

出演:串田和美、大森博史、武居卓、小日向

星一、串田十二夜、皆本麻帆、湯川ひな、

細川貴司、下地尚子/小日向文世

現代美術ギャラリー

◆立花文穂展 印象 IT'S ONLY A PAPER MOON

7.23(土)~10.10(月・祝)

[休館日]月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

[開場時間]10:00~18:00

(入場は17:30まで)

[入場料]一般¥900/団体(20名以上)¥700

高校生以下/70歳以上、障害者手帳をお持ち

の方と付き添いの方1名は無料



(へのへのもじへ)2014年

◆森英恵理事長 関連展示

8月11日に逝去された森理事長を偲び、当館で開催した3つの展覧会の概要を展示いたします。

8.23(火)~9.25(日)

[場所]水戸芸術館エントランスホール(入場無料)

[展示内容]展覧会ポスター、展示風景写真、映像、

ATMフェイス(当館案内係)制服(デザイン:森英恵)

者との交渉の陣頭指揮を執り、財政面では協賛企業様のご協力を仰ぎ、のべ13都市での演奏会を実現させました。吉田秀和初代館長が構想し、小澤征爾館長が総監督を務める水戸室内管弦楽団は、世界でも指折りのオーケストラであるという自負とともに、誰よりもこの楽団を深く愛し、情熱を注ぎ込まれました。近年は、名誉顧問として私たちの活動を見守ってくださっていました。旅立たれる最後まで、水戸のことを想ってくださっていたと聞いております。

ご生前の多大なご尽力に感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

水戸芸術館音楽部門 職員一同